

3 外科療法を行った頭頸部粘表皮癌の治療成績

新垣 晋・三上 俊彦・金丸 祥平
船山 昭典・新美 奏恵・小田 陽平
芳澤 享子・齊藤 力・林 孝文*

新潟大学大学院医歯学総合研究科
口腔生命科学専攻顎顔面再建学講座
組織再建口腔外科学分野
同 顎顔面放射線学分野*

粘表皮癌は腺様嚢胞癌に次いで多い唾液腺悪性腫瘍で、組織学的には粘液細胞と扁平上皮細胞から構成される。治療法は他の唾液腺悪性腫瘍と同様に外科療法が主体とされている。

過去36年間に治療を行った頭頸部粘表皮癌21症例(男性10例,女性11例)の治療成績について検討した。原発部位は頬粘膜6例,口蓋4例,歯肉歯槽部3例,舌,口底,咽頭がそれぞれ2例であった。T分類は,T15例,T210例,T3,T4がそれぞれ3例で,臨床的に頸部転移を認めたものは6例であった。治療法は外科療法以外に,放射線併用療法が8例,また,最近の症例では化学療法併用も行われていた。

原発巣再発3例,後発転移3例,遠隔転移が2例に認められ,切除断端陽性例が多かった。組織学的頸部転移は9例あり,複数個の転移例が多かった。原病死は6例に認められた。21症例の5年,10年,20年生存率はそれぞれ71%,71%,57%であった。

4 あきらめない癌治療・転移性脳腫瘍に対するガンマナイフの威力 — 10年の経験から —

佐藤 光弥・森井 研・長谷川顕士
五十川瑞穂*

北日本脳神経外科病院脳神経外科
新潟大学脳研究所脳神経外科*

当院でガンマナイフ(GK)治療を開始して10年が経過した。1,797例の転移性脳腫瘍の経験から確証を得たGKの威力について,4例を呈示して報告する。

〔症例1〕肺腺癌の小脳転移で同一部位に2回のGKを施行。病変部に2度の小出血を認めたが10

年間制御されている。

〔症例2〕3回のGKで計18カ所の転移巣を治療した大細胞肺癌。縦隔リンパ節や副腎への転移もあったが,化学療法も奏功し,8年10カ月後完全寛解。

〔症例3〕2回のGKを施行した胃癌の脳転移。初回より5年9カ月後腫瘍は完全に消失し照射部に白質障害も認めない。

〔症例4〕肺腺癌の小脳転移。3回の摘出術と全脳照射後の再発で,延髄に接する腫瘍も認めたが,2回目のGK後3年10カ月の現在も腫瘍再発なく,山登りも楽しめている。

脳転移に対するGK治療は,原発巣に対する積極的な治療を進めて行く上でも,治療期間が短く,負担が少ないこと,複数回治療も可能であることなど有利な点が多い。

5 癌性髄膜炎に対する髄注化学療法

高橋 英明・五十嵐夏恵・吉田 誠一

県立がんセンター新潟病院脳神経外科

癌性髄膜炎に対してQOLの向上を目的にpalliativeな髄注化学療法を試みたので報告する。

2006年5月から2008年4月まで,細胞診にて癌性髄膜炎の診断がなされた23例を対象とした。原発は乳癌15例,肺癌3例,上部消化管3例,その他2例であった。治療方針として,治療前髄液検査により細胞診classVが証明されたのち,Methotrexate 20mg, Ara-C 15mg, Predonine 20mg/body/5mlを腰椎穿刺にて3回施行した。髄液の細胞数と蛋白濃度を評価した。3回の髄注化学療法が行えた完遂群は,11例(48%)であった。脱落群12例のMSTは4週で,完遂群のMSTは15週(8週-46週)であった。髄液細胞数は,初回189から,139,78,76と減少し,髄液蛋白は360,286,234,166,180と推移した。髄液蛋白が200以下で臨床症状としての頭痛,嘔吐は見られなくなり,在宅可能となる例が多かった。3回の短期間髄注化学療法では髄液細胞診陰性化は認められないものの,症状緩和は得られ一時的ながら在宅ケア可能とすることができた。